

紀昀の『閱微草堂筆記』と戴震

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘二二(千八〇七―八五八六)

(二〇一五年十一月十二日受付、二〇一五年十二月十七日受理)

はじめに

紀昀(一七二四―一八〇五)は周知の如く、乾嘉時代の考拠学者としては異例ではあるが、最終的に礼部尚書協弁大学士の高官の地位に昇りつめた人物である。諡は文達、したがって紀文達公と記される。紀昀の著作の主なるものは『閱微草堂筆記』であることはいうまでもないであろう。この著作は紀昀の文学観や思想観が如実に表れており、紀昀の思想を語るうえでかかすことできないものである。

紀昀の思想に関しては、日本では近藤光男氏の「四庫全書と紀昀」、吉田純氏の「紀昀と『閱微草堂筆記』」等の論文において、紀昀の学問姿勢は「漢宋持平」の立場であったと述べている。⁽¹⁾ 中国における先行研究では、初期段階の一九四一年に仰彌氏の「関於紀文達」には「漢に於いて、宋に於いて、偏せず、倚せず、其の平に協せんことに務む」⁽²⁾とあるように、紀昀の学問観が漢学・理学を公平に扱う「漢宋持平」であると明記している。しか

し、その後、余時英氏が紀昀について「乾・嘉時代の反程・朱の第一番の猛将」⁽³⁾と述べたことから、理学を排斥する漢学一辺倒の印象が付与されたものと考えられる。この余氏の発言が後の紀昀の人物像に大きく影響し、漢学信奉者としての紀昀像が、その後の紀昀研究者の間で定着していった感がある。しかし、近年ではこのような紀昀像が台湾の王鵬凱氏等の論考で是正されてきている。

先述の余氏の発言は、戴震が反理学の思想を抱く機縁となったという文脈で語られている。つまり、紀昀が戴震の反理学思想に影響をあたえている、とするもので、その点についてはたしてどの程度であったのか。紀昀と戴震の交友関係は密接であったことは事実であり、相互に影響があったことは余氏の指摘したとおりであろう。そこで本稿は両者の思想的影響も視野にいれつつ、文学作品である『閱微草堂筆記』を中心に紀昀と戴震の関係を見ていくことで、そこで戴震がなにを語ったのかという点と、両者の思想的立場の相違等取り上げて概観していくことにする。

今回不統一の謗りは免れないが、『閱微草堂筆記』中の引用に關しては小説ということもあり現代語訳とした。翻訳にあたってはF C 2掲載の小山裕之氏の訳を参考にした。また『閱微草堂筆記』の底本としては『閱微草堂筆記 会校・会注・会評』鳳凰出版社を使用した。

一、戴震と『閱微草堂筆記』

吉田純氏の指摘するように、紀昀の『閱微草堂筆記』には戴震がしばしば登場する。それによると『灤陽消夏録』巻五第二十七則、巻六第十則、『槐西雜志』卷一第五十六則、卷二第三十二則、『姑妄聽之』卷四第二則、『灤陽統録』卷三十則、卷五第一則など⁽⁴⁾の計七話である。語った場所は紀昀の屋敷に逗留中の時か、四庫全書編纂時の余暇であったかもしれない。その内容を分析すると、話について戴震が聞き手として受動的に登場するものと、話者として能動的に戴震が語るものとに大別される。ここでは先ず聞き手としての戴震の登場した話を見ていくことにする。紙幅の都合上、一話が長い場合は現代語訳を要約して述べることにする。

① 『槐西雜志』一 五十六則

族兄の中涵が旌徳県の知県だった時、城の近くで虎が暴れ、

獵師数人が怪我をしたけれども、捕まえることができないという事件があった。県の人々は知県に「これは徽州の唐打獵を呼んでこない」と、この虎の被害を除くことはできない」と請願した。(休寧の戴東原がいうには、明の頃に唐某という人物がいた。新婚であったが、虎に殺されてしまった。その後唐某の嫁は子を出産した。嫁はその子に向かって祈りをこめて「もしおまえが虎を殺すことができなければ、私の子ではない。後世の子孫もし虎を殺すことができなければ、皆私の子孫ではない」といった。だから代々唐氏は虎を捕まえることができる)そこで知県は役人に手土産をもたせて唐のところへ往かせた。役人は帰ってきたから「唐氏は優れた技の持ち主二人選んで差し遣わしてくれるそうです。そろそろこちらに着くでしょう」と報告した。二人は旌徳県に着いたが、みれば一人は老人で鬚髪は白く、時々ゴゴホ咳き込んでいる。もう一人は少年で十六・七歳ぐらいである。大いに失望したが、せっかく来たのだからと食事の支度を命じた。老人は知県の中涵が内心大いに不満であることを察し、半ば跪いて「聞けばその虎は城より五里ばかりのところにいるとか、先ず虎を捕まえてから食事にしても遅くはありませんまい」という。そこで役人に案内させていくことにした。役人は谷の入り口まで案内すると、敢えて進まずそこで動かなくなつた。老人はそれを見て「わしがいるじゃないか、あんたそれ

でも恐ろしいかね」と笑った。谷に入ってちよほど中ほどになろうとした時、老人は少年の方を振り返り「この獣はまだ寝ているようだ。お前が叫んで起こしてやれ」という。少年は虎の鳴く声を真似て叫んだ。そうすると虎は林の中から出で、老人を襲おうとした。老人は手に柄の短い斧を持っていて、その寸法は縦八・九寸で横はその半分であった。老人はそれを持ち腕を奮って屹立していた。虎がぶつかつてくると、首を傾けて躲し、虎は頭上を飛び越えていったが、血を流し地に倒れてしまった。みれば虎は顎から尾まで斧に触れて斬られていた。⁽⁵⁾

この話は族兄中涵の語ったものであるが、戴震の話は注の形で挿入されている。そのため()中に入れて訳出した。旌徳県は戴震の故郷休寧県と同じく安徽省に属している。また徽州は休寧県を含む行政地区である。戴震は当然唐打獵のことを知っており、唐打獵の家が何故虎狩り専門の家柄になったかを説明するために記されている。

② 卷十二『槐西雜誌』二 三十二則

朱導江の語った話、「新泰の書生が郷試を受けた帰りのこと、友人達と早朝暗いうち出発したが、暗闇の中から二頭の

驢馬がきて、書生の集団と相前後した。見ると一人は老婆で、一人は若い美しい女である。書生は若い女のほうにぎになっていたが、若い女は自分と書生が親戚であり、以前書生の顔を見て知っている、と告げた。別れ道に来ると、若い女は家に招いて御馳走するという。書生は喜び同行者に晩に某所で待つように頼んだが、そのまま帰ってこなかった。翌日仲間が搜索したが、村に二人の女を知るものはなく、親戚と称する女の家もつきとめたが、その女は没してすでに半年たつていた。幽霊に惑わされたのか、妖に食らわれたのか、賊に襲われたのかわからないが、この話は少年の軽薄な者への戒めになるであろう」

その時方可村がその場において、秦隴に行った時これと似たような話を聞いたという。「ある人をあとからその妻の墓に合葬しようとして墓穴をあけると、別の男の遺骸があった。地下の両人の魂がどうやって出会うことができたのか、まったくわからない。『焦氏易林』にある「両夫妻を共にし、適きて雌となる莫し」とはこのための占いみたいなものだ」。戴東原もこの座にいて『後漢書』には三人の夫が妻を共有した話がある。君はどうしてそんなにもを知らないのだ」
私は冗談でこういった「御両所喧嘩をしないでください。山陰公主の男妾が三十人だったのを、忘れてはいませんか。しかしこの話に出てくるのは皆その夫を恐れないもの達です。

この女霊はひそかに少年をたくわえておきながら、後から合葬があることを考えていなかった。欲望を縦にして憂いを忘れていたのは免れないといえます。これを聞き、東原はため息をついて「欲を縦にして憂いを忘れるのは、この霊だけであろうか」といった。⁽⁶⁾

この話は朱導江の話に方可村、戴震、紀昀が寸評を述べる構成となっている。嘉慶五年本を底本とした『閱微草堂筆記 会校・会注・会評』、『紀曉嵐文集』等はこの形式に従う。しかし、上海進歩書局本や文光図書有限公司本等は方可村以下の話を、『槐西雜誌』二、二十八則の後に付している。二十八則は次のような話である。

昔下男だった蘭桂が語る。初めて都に行った時、人と一緒に福清会館に泊まった。その門の外は墓場だらけであった。月の暗いある日の夜、騒がしい声、哭泣するような声、また数人が宥めるような声が聞こえてきた。これは生きている人間ではなく、霊達が喧嘩している声だろうと思ひ、門の隙間から外を窺うと、そこにはなにも見えなかった。しかし、しばらくの時間息を殺してよく聞いてみると、ある一人の男が其の妻の棺を移す時、間違えて他家の婦人の棺を移してしまつた。婦人にはもとより夫がいて、近くに葬られていた。(そ

こに葬られていた夫は) 婦人がその人に奪われたため、その人の妻をこつち持つてくるのが当然であるべきだ。といい。妻はそれに従わなくて争つていたのである。ちょうど巡邏のものが銅鑼を鳴らして過ぎつたため、声は聞こえなくなつた。そのためその結果はわからないし、この誤つて他人の夫人を合葬してどのようなふうになつたかもわからない。しかしそのようであれば、霊というものは位牌に付き墓には付かないという説は、間違いであろう。⁽⁷⁾

前述の方可村、戴震、紀昀の一連の話が、合葬をキーワードにしている点と、方可村が「似た話」と述べている点から考えると、三十二則の後より二十八則の後のほうが理解しやすい、また、方可村の話と三十二則の話に類似点は見出せない。つまり三十二則の話とこの三名の寸評はまったく断絶しているといつてよい。王鵬凱氏によれば新興書局本に至つては、三十二則は方可村の話以下が欠落していると述べている。⁽⁸⁾ この移動は祖本である嘉慶五年本が方可村以下の話を三十二則に入れていたためそれが正しいとしても、原稿の段階でなんらかの錯簡があつたのではないかと考えられる。

ここに描写される戴震は章学誠が戴震の人物像について「生平の口舌勝を求め、或いは憤争を致し傷雅す」⁽⁹⁾と記したとおりであり、紀昀が座をとりもつている。この三十八則の後段は戴震

の圭角のある性格をよく表現しているといえる。最後に戴震が死してなお欲望をほしのままにする靈に對してため息つき嘆くところは、『孟子字義疏証』において「欲は窮むべからざるも、有るべからざるに非ず」⁽¹⁰⁾と寡欲を主張する戴震の思想を裏書しているようで興味深い。

③ 『灤陽統録』三十則

乾隆壬午九月、門人の呉恵叔が一人の扶乩をするものを連れてきた。そして仙人を私の邸内にある綠意軒の中に降ろした。壇に書かれた詩には「沈香亭畔艶陽の天、斗酒曾て題す詩百篇、二八の嬌嬈親ら硯を捧げ、今に至るまで身に御爐の香を帶ぶ。滿城の楓葉薊門の秋、五百年前舊遊に感じ、偶々蓬萊仙子と遇ひ、相携へて便ち上る酒家の樓」とあった。私が「ならばあなたは青蓮居士なのか」と問うと、「そうだと答える。そこでその場にいた趙春澗が突然立ち上がり質問した。「大仙の詩は斗酒百篇でしょうが、沈香亭にはいなかのでは。楊貴妃は馬嵬で没しましたが、年齢は三十八歳であつて、その時十六歳ではなかつたはずです。大仙の足跡は漁陽にいったことはないはず。なぜ旧遊に感じるのですか。天竺から今に至るまでは、五百年以上あります。どうして大仙の詩は誤記だらけなのですか」しかし乩はただ「我醉いて

眠らんと欲す」の四字を示すだけであつた。再びこれに問うてみたが、まったく動かなかつた。大抵乩仙というものは、単なる普通の靈が憑依するものであるが、しかしほんとうに乩仙が憑依することもあるようだ。この扶乩というものは、ほぼ吟詠を理解する人がその技を磨いてこれを行うようである。だからこういう人と扶乩をすれば、詩を書くことができ。しかし人を変えれば詩を書くことができなくなる。その詩も皆愛すべき光景を詠っており、さまざまなところで用いられているが、決して古人の靈が壇に降りてきて書いているものではない。だからその日にわかに春澗に誤りを指摘され、困つてしまう様子は察するべきであろう。後にたまたま戴庶常東原とこの話になつた時、東原は驚いて「私も嘗て別の一人が扶乩を行っているのを見たことがあるが、李太白が降壇してこの二詩を書いた。ただ滿城が滿林となり、薊門が大江になつている点が相違しているだけであつた」という。江湖の遊士がこの種の稿本をもつて、仲間内で伝授しているみたいであるから、このような相違があることも、難詰すべきことではないことがわかる。⁽¹¹⁾

扶乩は所謂日本の狐狸狗、西洋のウイジャ盤に近い交霊術である。このような交霊術は往々にして詐術が横行するのが常である。この場合も当然降壇してきたのは李白ではなく、術者によるまっ

多くの虚偽であった。ただ考拠学者の泰斗といわれている紀昀の周囲にはその学に長じた者が集まっていたとみえ、その場にいた趙春澗が、扶乩によつて降壇した李白の詩といわれるものが、如何に整合性を欠くものであるかを瞬時に暴いてみせる。また後に紀昀が戴震と談これに及んだ時、戴震自身もこの詩を記憶しており、語句の違いを指摘するなどの、博覧強記ぶりを示す。この話から紀昀の邸が考拠学者のサロンようになっていたことが窺える。

二、怪談を語る戴震

ここでは『閩微草堂筆記』中で前章とは違い、戴震が話者として登場する話を見ていくことにする。

④ 『灤陽消夏録』五 二十七則

戴東原が語った話、ある時二人の儒者が灯火のもとで対談し、『春秋』にいう正月とは周の暦なのか、夏の暦なのか議論し論争になった。議論は白熱してお互いに激越な口調になってきた。すると窓の外から大きなため息をついて「左氏は周時代の人だから、周の正朔を知らないわけではないでしょう。両先生方どうしてそんなに言葉を費やす必要があるでしょうか」という声が聞こえてきた。驚いて出て窓の外を見ると、

一人の小童が熟睡しているだけであった。

この二つの話を見れば、儒者で日々考証を事とする者は「曰若稽古」の講釈に、ある時は十四万言を費やすが、どうしてそれを冥界から見えていて、そばに来てからかかってない者がないといえようか。⁽¹²⁾

戴震の語ったこの話は、白熱した議論の結論を、結局霊に教えられるという筋である。紀昀の評は「この二つの話」以下であるが、本稿では割愛したが、二十七則は戴震の話の前に、朱青雲と高西園が思い出せなかつた唐代の詩人の名を霊に教えてもらう話が収録されている。故に紀昀は「この二話」というのである。ここで紀昀は理学だけではなく、当時全盛を極めた考拠学すら揶揄している。

⑤ 『灤陽消夏録』六 十則

戴東原が語った話、明代の末期に宋某という者がいた。墓地を求めて歙県の山奥にまできたが、日が暮れてきはじめ、風雨が来そうになった。見れば崖下に洞窟があるので、その中に入って、風雨をしばらく避けることにした。すると洞内から「この中には幽霊がいるので、君は入ってきてはいけない」という人の声が聞こえる。宋某は「ではあなたはな

「ぜ入っているのですか」と尋ねると、「私は霊だ」と答えた。宋が会って見たいという。霊は「君と会うと、陰陽の気が戦ってしまい、君は必ず寒気がして発熱し、不安になるだろう。だから君は焚き火をして自らを守ったほうがいい、また座を離して話をしよう」宋が「あなたは霊なら墓があるでしょう。なぜこんな所にいるのですか」と質問すると、「私は宋の神宗の頃県令となつたが、役人達が財貨を盗み、出世を争うのがいやになり、職を棄て帰田したのだ。死んだ後閻魔に頼んで、人界に輪廻転生することないようにしてもらい、来世の秩禄によつて冥界の役人してもらつたが、冥界でも財貨の貪りと出世争いばかりなのは人界と変わらなかつた。そこでまた職を棄て墓に帰つたのだが、墓には多くの霊がいて行つたり来りして騒がしく、そのうるさいことはこの上もないため、避難してここに居るのだ。ここは風雨の苦しみや、寂しさに堪え難いといつても、官界の風波や、世間の落とした穴に比べれば、切利天にいるような心地がする。寂しく人の居ない山の中で年月を忘れ、霊とも会うこともなく何年たつたかわからないが、ここで自ら世俗の關係から解脱し、自然の理を思索できることを喜んでいたので。しかし、ここにも人が来てしまった。明朝引越すことにしよう。武陵の漁師は二度と桃源郷に来てはいけない」霊は話終わったあとにはなにも答えなくなつた。姓名を聞いても答えないので、宋は携

えていた筆硯を用い、墨で鬼隠の二文字を洞窟の入り口に大書して帰つた。^⑬

この話は、歙県が舞台となつている。歙県は戴震の故郷である休寧県の近くである。要するに戴震は近所に伝承されている怪談の一つとして、紀昀にこの話を披露したと考えられる。

⑥ 『姑妄聽之』四 二則

戴東原が語つた話、狐が人家の空いている部屋に住んでいた。そしてその主人とよく話をすることができた。狐は贈り物をしたりし、また互いに物を借りあうような仲であり、まるで隣人のようなつきあひをしていた。ある日狐が主人に告げていうには「君の別のところにある空き部屋に、首吊りの霊が昔から住み着いていた。君が近ごろこの部屋を壊したため、首吊りの霊は居場所をなくしてしまった。そこで私の所へ来て部屋を奪いにきて争いになっている。首吊りの霊は時々その醜い姿を現すので、女兒が恐怖している。まったく憎むべき奴である。また祟りをなして、女兒に寒熱を起こさせたりする。もう堪忍できない。そこで頼みがあるのだが、某道觀の道士は除霊ができるそうだ、君どうかこの首吊りの霊の害を除いてくれないか」いわれたとおりに主人はそ

の道観に行き護符をもらって帰ってきた。中庭で護符を焼くと、突然暴風が起り、雷鳴のような大きな音がした。驚いていると屋根瓦から鳥の鳴くような乱れた音がして、数十人が奔走して何かを踏みつけるような音が聞こえた。そして屋上から「私の計略は大失敗であった。後悔しても仕方ない。先ほど神将が降臨して首吊りの霊を縛ったが、私も追い払われてしまった。今それで君とはお別れしなくてはならなかった」思うにこの狐は怒りに任せ自分の計略ばかりを考えていたので、ともだおれになってしまった。この狐を見て戒めとするべきであろう。⁽¹⁴⁾

狐霊が人間と親しくなり、人間に頼んで自分に害をなす首吊りの霊を追い払おうとしたが、返って依頼した狐霊も追い払われてしまう話である。狐霊は策士策に溺れるというべき結果になってしまった。内容からみるとこの話は寓話の一種ではないだろうか。

⑦ 『灤陽統録』五 一則

戴東原が語った話、一族の族祖父に当たる某人物が、片田舎の空き家に住んだ事がある。長いこと人が住まなかったため、ある人は幽霊が出るといっていた。しかし某は声を励まして「私はそんなものは恐れない」といっていた。夜になる

と灯火の下に霊がその姿を現し、その陰惨の気は肌・骨を突き刺すようであった。巨大な霊は怒り声をあらげて「お前は私が恐ろしくないのか」といった。某が「そうだ」と返答すると、霊は様々な醜い形に変化して見せた。しばらくしてまた霊は「どうだ、これでも恐ろしくないか」という。某は依然「怖くない」と答える。霊はやや顔色を和らげて「私も絶対にお前をここから叩き出そうというのではない。ただお前が大言壮語するのが気に入らないだけなのだよ、お前がただ一言怖いといえ、私は消え去ろうじゃないか」という。それを聞いた某は怒って「実際にお前なんか怖くない、何で偽ってまで怖いなんていえようか、お前の勝手にしろ」霊は再三某に頼んだが、某は一言もこたえなかった。そこで霊は大きなため息をつき「私はここに住んで三十余年になるが、今までおまえのような強情者は見たことがない。お前みたいな無知な奴と、どうして同居できようか」といい、その姿を突然消した。ある人がこれを批判して「霊を恐れるのは常人の感情だろう。しかも偽ってただ恐ろしいといえ、何事もなく収まるじゃないか。双方が激しくぶつかり合えばどうなったかわからないよ」といった。某はそれに答えて「もし神通力のようなものを会得している者であったなら、気を鎮めて冷静に魔を払うであろう。しかし、私はそんなことができる人間じゃない。だから気力によって相手を凌ぐ方法しかなか

つたのだ。氣力が盛大であれば霊は迫ってくるのができない。もし少しでも相手に迎合するようなことがあれば、氣力は衰えてしまい、そこに霊が乗じてくる。そしてあの手この手で私を餌食にしてしまうだろう。幸いなことに私はその術中に嵌らなかつたのである」さっきの批判していた人もこの話を聞いて、それが正解であると認めた。¹⁶⁾

この話は戴震の一族の一人の体験談として採録されている。霊ですら匙を投げる某の強情な姿勢は、先述した章学誠のいう戴震の姿を彷彿とさせる。戴震の激しやすい性格は遺伝ともいえるのかも知れない。

以上、『閔微草堂筆記』における戴震に関する部分をみてきたが、そこには学者としての戴震ではなく、人間としてかなりくだけた感じの戴震の一端がうかがえる。既述したように話の内容は戴震が他人の話に対して感想や評価、注を加える三話と、戴震自身が話者となる四話である。特徴としては③・⑤・⑦の三話は徽州地域での話で、いわば地元の話ということになる。もしかしたら④・⑥の話も、場所を明記していないが徽州地域に伝わっていた話の可能性もある。あるいはむしろ紀昀のほうが著書の珍談奇聞の内容を広げるために、戴震に対して徽州地方の話を要求したのかもしれない。いずれにしても戴震に関係したこの七話は記録すべきものとして『閔微草堂筆記』に採録された。

三、戴震と紀昀の交友関係

前章では『閔微草堂筆記』から戴震関係の部分を見てきたが、具体的紀昀と戴震のかかわりは如何なるものであったのか、この点についてを本章では述べていく。周知の如く紀昀と戴震の出会い、乾隆二十年乙亥のことである。これは紀昀自身が「考工器図序」において「乾隆乙亥夏、余初めて戴君を識り、其の書を奇とす」¹⁶⁾と記していることから明瞭である。また、段玉裁は『戴東原年譜』にこの年に戴震が入京したと記しており、また賀治起・呉慶栄の『紀昀年譜』この年次としているが、しかし、楊応芹氏の「段著東原年譜訂補」には、戴震の入京時を王昶の「戴東原墓誌銘」・錢大昕の「竹汀居士年譜」の記述を証として、前年の乾隆十九年甲戌とする。¹⁷⁾

つまり、戴震は乾隆十九年に入京し、翌二十年に紀昀と交わりを結んだということであろう。戴震の北京の学術界におけるデビューに関しては、錢大昕がこれに関与していることがわかる。錢大昕の「戴先生震伝」に記述に以下の如く記す。

年三十餘、策蹇して京師に至り、逆旅に困み、饘粥幾んど繼がず、人皆目して狂生と爲す。一日、其の著す所の書を攜へて予の齋を過ぎり、談論すること竟日。既にして去り、予之を目送して、嘆じて曰く、天下の奇才なり、と。時に金匱の秦文恭公恵田兼ねて算學を理め、推歩に精なる者を求む。

予輒ち先生の名を擧ぐ。秦公大いに喜び、即日駕に命じて、之を訪ふ。延きて其の邸のまらしめ、與に觀象授時の旨を講じ、以て未だ聞かざる所を聞くと爲す。秦公五禮通考を撰し、往々其の説を採る。高郵の王文肅公安國も亦延きて先生を家塾に致し、其の子念孫をして之を師とせしむ。一時館閣の通人、河間の紀太史昀・嘉定の王編修鳴盛・青浦王舎人昶・大興朱太史筠、先後して先生と交を定む。是に於いて海内皆戴先生有るを知る。⁽¹⁸⁾

これを見ると、錢大昕の推薦により世間に戴震の名が知られることになったことがわかる。

一方紀昀は乾隆十九年に、進士に合格し庶吉士となつてゐる。紀昀自身の言葉による「是の科最も人を得ると號す」⁽¹⁹⁾と述べられるように、同年として存在するのは王鳴盛・錢大昕・朱筠・王昶等のそうそうたる考拠学者達であり、そのような人物達が戴震の才を認めただけである。中でも紀昀は特に親しく戴震と交際したと考えていいであろう。『戴震東先生原年譜』・『紀曉嵐年譜』共に乾隆二十年の項に、「戴震は紀昀の館に逗留し、『句股割圓記』を作つた」⁽²⁰⁾とある。紀昀は戴震の『考工記圖』を上梓するわけであるが、その様子を先述の「工記図序」続きは次のように述べる。

其の書を奇とし、之を梓に付さんと欲す。之より遅るると半載、戴君乃ち余の爲に先後の鄭註を刪取して、自ら其の説を定めて以て補註を爲す。又越えること半載、書成る。仍りて名づけて考工記圖と曰ふは、其の始めに従ふなり。戴君余に語りて曰く、昔丁卯・戊辰の間に、先師程中允是の書を出して、以て齊學士次風先生に示す。學士一見して歎じて曰く、誠に奇書なり、と。今再び子に遇ひ之を奇とす、是の書憾まざるべし、と。戴君深く古人の小學を明らかにす。故に其の考證制度、字義、漢已降儒者及ぶ能はざる所と爲る。是を以て之を聖人遺經に求め、發明獨り多し。⁽²¹⁾

『考工記圖』は当時の考拠学界において、極めて重視されるべきものと考えられたため、紀昀は出版したのである。

余英時氏は当時の北京における考拠学運動中心人物について『論戴震与章学誠』で以下の如く記す。

当時の北京における考証学の運動で、最も影響力のあつた領袖といふべき人物が朱筠と紀昀であつた。朱筠は經学上宋儒の「根柢のない虚構」と「仏教の説を混入」させていることについて批判した。(中略)紀昀は朱筠よりも更に激烈となり、彼は乾・嘉時代の反程・朱学の第一の猛將とも言うべき存在であつた。紀昀は四庫全書館の首席総纂官でありこの

組織を通じて、彼は広く反宋学的思潮を掘り下げて、全学术界に推進した。⁽²²⁾

余氏のこの紀昀に対する記述は、同書に引用する、余嘉錫の『四庫提要弁證』における紀昀に対する評価としての、次の文言に基づく。

且つ自ら漢學と名づけ、深く性理を惡み、遂に峻詞醜詆、宋儒を攻撃して、其の書を細讀するを肯へんぜず。⁽²³⁾

つまり、余氏はこれを以て紀昀を「反程・朱学の猛将」と位置づけている。また、朱筠についても余氏は「反理学」的学者としているが、王昶の「翰林院編修朱君墓表」に「經を解するに鄭・孔を宗とし、宋・元の諸儒の説を兼取す」⁽²⁴⁾とあるように理学に対して攻撃的とは言い難い。しかし、江藩の『漢学師承記』には「説經は漢儒を宗とし、宋・元諸家の説を取らず」⁽²⁵⁾とあるため、朱筠を「反理学」の徒と位置づけるようになったのであろう。これは漆永祥氏によると江藩が王昶の文を敢えて改めたとしている。⁽²⁶⁾つまり紀昀・朱筠ともに考拠学を主としていたが、真つ向から理学を否定していたわけではない。

余氏は戴震の思想について乾隆十九年以前に理学への批判はなく、それ以降反理学への思想的転機に紀昀と惠棟の影響があった

と指摘する。⁽²⁷⁾先述した余氏が描いた「反程・朱の猛将」イメージは、その後の紀昀研究に多大な影響を与えた。余氏は当然『四庫提要総目』や紀昀の著作である『闕微草堂筆記』についても反理学的著作として捉えている。

晁嵐は程・朱を『提要』の中で明らかに排撃し、『闕微草堂筆記』の内容においては、暗に排撃する形となっている。『筆記』中の多くの「講学家」を嘲笑する話は、全て彼が事実無根の話を苦労して作りあげたものである。⁽²⁸⁾

確かにこの両書ともにそのような傾向があるのは事実であるが、一概にそうともいえない面もある。

張維屏氏は余氏の説を受けて、次のように述べる。

紀昀自身は四庫全書の首席総纂官となり、乾・嘉時代の反宋学の主たる猛将であった。漢学の大本營である四庫館の組織を通じて、紀昀は広く深く反宋思潮を全学界に推進しようとした。紀氏と惠棟及び錢大昕・王鳴盛らは、訓詁名物の方面より、宋儒の立説した經典の基礎を破壊した。しかし、彼らの反宋の言論はおよそ惠氏の楹帖に記された、「六経は服・鄭を尊び、百行は程・朱に法る」という枠組みのとおり、何の益もない漢・宋の争いを進行させていった。⁽²⁹⁾

張氏は余氏とはやや見解を異にし、紀昀等が惠士奇の言う「六經は服・鄭を尊び、百行は程・朱に法る」という思想の枠組みの中で、漢・宋の争いが行われたという見解を示す。また張麗珠氏はほぼ余英時氏の説を踏襲する。⁽³⁰⁾ これらはいずれにしても紀昀を「反理学の猛将」とする捉え方である。これらの立場は『閔微草堂筆記』中や『総目提要』等に散見する紀昀の理学に対する攻撃的言辞からくるものである。

しかし、既に述べた近藤・吉田両氏の論文に指摘されるように、紀昀を単に「反理学の猛将」と位置づけることは無理がある。なぜならば吉田氏も引用する「周易義象合纂序」において紀昀自身が漢学・宋学の論争を否定して学問の真理を都市に譬え、「譬へば一都會なり、南門より入るべし。北門より入るべし。東門より入るべし。西門より入るべし。各々其の近き所の途よりし、各々以て便と爲すも、都會は則ち一なり」⁽³¹⁾ どの門徑より入つてもよいと述べ、また「丙辰会試序」には以下のごとく述べる。

經義の中に至りては、又二派に分る。漢儒の學を爲す者は、六書を沿溯し、訓詁を考求し、古義をして復後世に明らかにせしむ、是一家なり。宋儒の學を爲す者は、精微を辨別し、異同を折衷し、六經の微旨をして羣言に淆亂せざらしむ。是又一家なり。國家の功令は五經の傳註は宋學を用いるも、十

三經注疏も亦學官に列す。良に以て制藝は義理を明らかにするを主とすれば、固より當に宋學を以て宗と爲して、漢學を以て其の遺す所を補苴して其の太過を糾繩すべきのみ。⁽³²⁾

これを見ると紀昀は、科挙においては理学を重視し、考拋学はその補助的存在とみている。

では何故『閔微草堂筆記』等において執拗な理学批判を展開していったのであろうか。この点について、王鵬凱氏は左のように述べる。

『閔微草堂筆記』中に紀昀の描いた儒者の形態の主要なものとは三種類であった。講学家・真の君子・頑固迂腐な学究である。この三種類の儒者に対して紀昀は靈や狐の口を通して機諷・賞賛・揶揄を加えた。中でも講学家の生態を最も多く描いている。『閔微草堂筆記』の中には多くの講学家の話が出てくる。紀昀はその話を描写して、これらの講学家の空談高論、虚栄心が強く負けず嫌い、残酷で人情を理解しない性格と道学に名を借りて行われる種々の醜態を捉えて、余すことなく書き尽くした。⁽³³⁾

王氏は以下『閔微草堂筆記』中の儒者の例話を詳細に三分類している。それを見ると紀昀は儒者を三種類に分類し、特に講学家

の理学を盾にした欺瞞に筆誅を加えているのである。同じ理学家でも人格的に優れた人物は真の君子に分類されている。また頑固迂腐には先述の二章の④にあるような無用な考拠をする者も含まれている。講学家の批判が多い所以は儒者でありながら道理を以て人を責めるが、自身の行為には平然として顧みない。このような人物は多く、現在でも往々にしてみるが、紀昀にはそれが様々な事件を起こしており、社会的に有害であると感じたためであろう。このような講学家批判が「反理学」的と誤解されたのである。

また紀昀は「情」というものを重視しており『閔微草堂筆記』中に「天下の事は情理のみ、然れども情理は時にして互いに妨げることあり」⁽³⁴⁾という文言がある。この点については吉田氏は戴震の思想と気脈を通じる部分があるとして、「戴震が「情」を主に経世家的な観点から、人々の生存欲の総体として捉えているのに対し、紀昀は人間生活の個別具体の場面で生起する情感に主眼をおいて、それを捉えているように思われる」⁽³⁵⁾と指摘する。

確かに紀昀は「情」における発言に関しては、戴震の『孟子字義疏証』の内容と相通する面があるようにみえる。しかし紀昀の『孟子字義疏証』に対する評価として、章炳麟の「釈戴」には「紀昀臂を攘ひて之を扔ちて、以て清浄潔身の士を非りて、流汗の行ひに長ず」⁽³⁶⁾と記している。紀昀のこの言葉の出典を章炳麟は明記していないが、理学を肯定的に評価していた紀昀ならば、右の発言は当然といえるかもしれない。王氏は門下生であった阮元が

『皇清経解』に『孟子字義疏証』を收入しなかったのは紀昀の前述の発言による可能性があると推測している。⁽³⁷⁾

また紀昀は考拠に関しても戴震とは異なる部分もあった。戴震の著書『声韻考』で等韻の学において戴震は孫炎を鼻祖とするのに対し、紀昀は神珙であるとして論争している。「与余存吾太史書」には以下のごとく記す。

安んぞ等韻の學を以て、諸を神珙に歸するも、反りて孫炎の末派旁支と謂ふを得んや。東原博く羣書を極むも、此の條は應ぜず見ず。昀嘗て此の條を擧げて東原を詰るも、東原亦應ぜず記さず。是の書を刻せし時仍ほ諱みて言はず。務めて己の説を伸ばす。⁽³⁸⁾

戴震は自説に固執して紀昀の主張に全く耳を傾けなかったようである。

親しく紀昀の警咳に接したであろう阮元は「紀文達公集序」に「蓋し公の學は漢・宋の儒術の是非を辨ずるに在り」⁽³⁹⁾と記し、これが紀昀の学問の特徴であるとしている。

おわりに

以上、『閔微草堂筆記』中の戴震に関する部分と紀昀と戴震の思想的差異を概観してきた。

『閱微草堂筆記』に採録された戴震が登場する話は、その勝気な性格や博覧強記ぶりを彷彿とさせる。話者として語った内容は徽州関係の話多いが、当然のことながら怪談であるため、そこには思想的な論の展開はみることができないが、しかし、そこには両者の親密な関係が窺える。戴震が紀昀の邸宅に滞在していたことが明確にできるのは、乾隆二十年、乾隆二十四年、乾隆三十八年である。紀昀が「昀の家に主ること前後十年に幾し」⁽⁴⁰⁾というのはこの間のことを指すのであろう。乾隆二十年は前述した『考工図記』出版に関して、二十四年は史榮の『風雅遺音』を出版した時で、楊応芹氏の『段著東原年譜訂補』はこのことを記してはいない。乾隆三十八年は紀昀等の推薦で举人でありながら四庫全書の参修官に充られた時である。この時に戴震は入京後の十月三十日、段玉裁宛の書簡において「僕今暫く紀公の處に寓す」⁽⁴¹⁾と記している。その後戴震は乾隆四十年に特別に同進士出身を賜り、翰林院庶吉士を授けられ、同四十二年に五十五歳で没している。これらのことから紀昀は戴震のパトロン的存在であり、よき協力者とみることができであろう。そのような交友関係の中から『閱微草堂筆記』に戴震の話等が採録されたことは想像に難くない。これらのことから余英時氏のごとく紀昀が戴震の思想に多大なる影響を与えたとする見解が「反理学」というものを軸にして展開されていたのである。

しかし、一見軌を一にするがごとくにみえる両者の思想も仔細

にみてゆくと、見解を異にしている部分があることが理解できる。紀昀の思想は従来指摘されてきたように漢宋持平の立場であったので、戴震に反理学の影響を与えたとは考えにくい。もちろん紀昀の講学家批判は耳にしていたであろうが、恐らく戴震の反理学思想は紀昀とは別の立場からの見解によるものではないだろうか。となれば紀昀が『孟子字義疏証』に対して「清淨潔身の士を非りて、流汗の行いに長ず」と批判するのも当然であるといえる。既述したように考拠に関しても紀昀は戴震の『声韻考』の議論についても両者は見解を異にし、戴震が持論を曲げずに出版したことに対し遺憾の意を表することもあり、紀昀と戴震の思想は懸隔があるものといわざるをえないであろう。それは特に理学についての認識の相違がそれを示しているといえる。つまり、紀昀は思想的に理学肯定派であり「六経は服・鄭を尊び、百行は程・朱に法る」という範囲から逸脱することはなかったのである。

注

- (1) 近藤光男「四庫全書と紀昀」『清朝考証学の研究』所収
一九八七年 研文出版社 八六頁 吉田純「紀昀と『閱微草堂筆記』」『清朝考証学の群像』所収 二〇〇六年 創

文社 七三頁

- (2) 仰彌「關於紀文達」『中国近三百年學術思想論集』所収

- 一九七八年 存粹社 一五三頁
- (3) 余英時『論戴震與章學誠』一九九六年 東大圖書公司 一
二六〇—二七頁
- (4) 吉田純 前掲書 九二頁
- (5) 紀昀『闕微草堂筆記』会校・会注・会評』吳波 尹海江
曾紹皇 張偉麗輯校 二〇一二年 鳳凰出版社 五四〇
頁
- (6) 紀昀 前掲書 五八六—五八七頁 前半の話は要約して訳
した。
- (7) 紀昀 前掲書 五八三—五八四頁
- (8) 王鵬凱『紀昀研究論述』二〇〇九年 文史哲出版社 十
九頁
- (9) 章学誠『文史通義校注・校讎通義校注』二〇〇二年 頂
淵文化事業有限公司 二七六頁
- (10) 戴震『戴震全書』卷六 二〇一二年 黄山書社 一六
〇頁
- (11) 紀昀『闕微草堂筆記』会校・会注・会評』 五八三頁
- (12) 紀昀 前掲書 二〇六頁
- (13) 紀昀 前掲書 二二九頁
- (14) 紀昀 前掲書 九〇六頁
- (15) 紀昀 前掲書 一〇四八頁
- (16) 紀昀『紀文達公遺集』『儒藏』精華編第二七五冊所収 二
- 〇一二年 北京大学出版社 一六四頁
- (17) 戴震 前掲書 卷七 一四五頁
- (18) 戴震 前掲書卷七 十五—十六頁 「年三十餘、策蹇至京
師、困於逆旅、饘粥幾不繼、人皆目爲狂生。一日、攜其所
著書過予齋、談論竟日。既去、予目送之、嘆曰、天下奇才
時金匱秦文恭公惠田兼理算學、求精於推步者。予輒舉先生
名。秦公大喜、即日命駕訪之。延主其邸、與講觀象授時之
旨、以爲聞所未聞。秦公撰五禮通考、往々採其說。高郵王
文肅公安國亦延致先生家塾、令其子念孫師之。一時館閣通
人、河間紀太史昀・嘉定王編修鳴盛・青浦王舍人昶・大興
朱太史筠、先後與先生定交。於是海內皆知有戴先生矣」
- (19) 紀昀 前掲書 三五〇頁
- (20) 戴震 前掲書 卷七 一四五頁 賀治起・吳慶榮『紀曉
嵐年譜』一九九三年 書目文獻出版社 十九頁
- (21) 紀昀 前掲書 一六四頁 「奇其書、欲付之梓以付。遲之半
載、戴君乃爲余刪取先後鄭註、而自定其說以爲補註。又越
半載、書成。仍名曰考工記圖、從其始。戴君語余曰、昔丁
卯・戊辰間、先師程中允出是書、以示齊學士次風先生。學
士一見而歎曰、誠奇書也。今再遇子奇之、是書可不憾。戴
君深明古小學。故其考證制度、字義、爲漢已降儒者所不
能及。以是求之聖人遺經、發明獨多」
- (22) 余英時 前掲書 一二六頁

- (23) 余嘉錫 『四庫提要弁證』 一九八〇年 中華書局 五一頁
「且自名漢學、深惡性理、遂峻詞醜詞、攻擊宋儒、而不肯細讀其書」
- (24) 錢儀吉 『清朝碑伝全集』 卷一 一九八四年 大化書局 六四一頁
- (25) 江藩纂 『漆永祥箋積』 『漢學師承記箋積』 二〇〇六年 上海古籍出版社 四二八頁
- (26) 江藩纂 『漆永祥箋積』 前掲書 『漆永祥氏は箋積において「江氏此数句、採自王昶墓表、然曲改其意」と述べている。
- (27) 余英時 『前掲書』 一二七頁
- (28) 余英時 『前掲書』 一二六頁
- (29) 張維屏 『紀昀与乾嘉學術』 一九九八年 国立台湾大学文史叢刊 五六頁
- (30) 張麗珠 『清代新義理學』 二〇〇三年 里仁書局 八四頁
- (31) 紀昀 『前掲書』 一六〇頁
- (32) 紀昀 『前掲書』 一五五頁 「至經義之中、又分二派。爲漢儒之學者、沿溯六書、考求訓詁、使古義復明於後世、是一家也。爲宋儒之學者、辨別精微、折衷異同、使六經微旨不淆亂於羣言。是又一家也。國家功令、五經傳註用宋學、而十三經注疏亦列學官。良以制藝主於明義理、固當以宋學爲宗、而以漢學補苴其所遺、糾繩其太過耳」
- (33) 王鵬凱 『前掲書』 一九三頁
- (34) 紀昀 『閱微草堂筆記』 会校・会注・会評』 八〇六頁
- (35) 吉田純 『前掲書』 八二頁
- (36) 戴震 『前掲書』 卷七 四二九頁
- (37) 王鵬凱 『前掲書』 一五七頁
- (38) 紀昀 『紀文達公遺集』 二八二頁 「安得以等韻之學歸諸神珙、反謂爲孫炎之末派旁支哉。東原博極羣書、此條不應不見。昀嘗舉此條詰東原、東原亦不應不記。而刻是書時仍諱而不言。務伸己說」
- (39) 阮元 『擘經室集』 一九九三年 中華書局 六七九頁
- (40) 紀昀 『前掲書』 二八二頁
- (41) 戴震 『前掲書』 卷七 一六六頁

Jiyun's "Yueweicaotunghiji" and Dai Zhen

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract